宗教性が死別後の主観的心理変化に与える影響

○河野由美¹・金児曉嗣²

(¹畿央大学健康科学研究科・²相愛大学)

キーワード：宗教性 ストレス関連成長 死別後の主観的心理変化

Effects of the religiosity on subjective psychological changes of bereavement

Yumi KONO¹ and Satoru KANEKO²

(¹ Graduate School of Health Science, Kio Univ., ² Soai Univ.)

Key Words: Religiosity, Stress Related Growth, Subjective Psychological Changes of Bereavement.

目 的

遺族の死別後の心理的变化に関しては、生活上の不調や生きる意欲の喪失などネガティブな変化のみならず、人間的成長を遂げるなどポジティブな変化（ストレス関連成長）も認められることが指摘されている（東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫, 2001; 坂口, 2002; 福岡欣治・安藤清志・松井豊, 2003; 渡邊・岡本, 2005; 河野, 2013）。一方、死に対する態度には宗教観が密接に関連していることが先行研究で明らかにされてきた。本研究は、金児（1997）の宗教観尺度を用いて、死別後の主観的心理変化に宗教観がどのように影響するかを検討することを目的とした。

方 法

「使用尺度」

宗教観を測定するのに、金児（1997）の宗教観尺度を用い、リッカート方式の6件法で回答を求めた。

死別後の主観的心理変化を測定するのに、河野（2013）の死別後の主観的心理変化尺度を用い、リッカート方式の5件法で回答を求めた。

「対象と時期等」

2013年1月に3つの大学にて実施した。講義時間後に調査の趣旨を説明し、同意の得られた者を対象とした。

調査協力対象者：総数249人、男性150人（60.2%）、女性98人（39.4%）、無記名1人（0.4%）。平均年齢19.9歳。

実施においては、大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。

結 果

「宗教観尺度」

宗教観尺度15項目に因子分析（重みなし最小二乗法、プロマックス回転）を実施した。その結果これまでの先行研究と一致した3因子が抽出された。第1因子は「霊魂観念」で $\alpha = .83$ 、第2因子は向宗教性で $\alpha = .71$ 、第3因子は加護観念で $\alpha = .71$ となった。各因子に高い負荷量を示した項目の点数を加算し、項目数で除したものを各尺度得点とした。6件法を用いているため中位点は3.5点となる。加護観念（ $M=3.7$, $SD=.77$ ）は中位点を超えているが、霊魂観念（ $M=3.3$, $SD=.98$ ）と向宗教性（ $M=2.9$, $SD=.75$ ）は中位点を超えていない。

「死別後の主観的心理変化尺度」

調査対象3大学のうち、1大学においては、死別後の主観的心理変化を質問しなかったため、本尺度に関しては調査対象者数124人となる。これまで大切な人を亡くした経験のある者は71名（57.3%）で、大学生においても約半数の者が大切な人を亡くした経験を有している。「死別後の年数」は平均65.1か月であった。「亡くなった方の続柄」では祖父母が76.1%と最も多い。「亡くなった方の死亡原因」では癌が

44.9%と最も多かった。

死別経験のある71名に対して、死別後の主観的心理変化尺度12項目への回答を求め、それに因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。その結果2因子解となった。第1因子は「肯定的変化」で $\alpha = .87$ 、第2因子は「否定的変化」で $\alpha = .82$ となった。少ない被験者数であるが、先行研究と類似した結果が得られ、尺度の信頼性もほぼ満足のできるものであった。

各因子に高い負荷量を示した項目の点数を加算し、項目数で除したものを各尺度得点とした。5件法を用いているため中位点は3点となる。「肯定的変化」得点（ $M=3.1$, $SD=.86$ ）は中位点を超え、「否定的変化」得点（ $M=1.8$, $SD=.65$ ）は中位点を下回っている。

「死別後の主観的变化に影響する要因」

死別後の主観的变化尺度得点を目的変数とし、宗教観尺度得点、死別からの月数、性別、続柄、死亡原因（癌か否か）を説明変数とした、重回帰分析（ステップワイズ法）を実施した。その結果、死別後の肯定的変化には霊魂観念（ $\beta=.58$ ）が最も強い影響力を示し、死後の世界や輪廻を信じる態度でもある霊魂観念が強い人ほど、死別後の肯定的変化が大きいたことが明らかとなった。死別後の否定的変化では、亡くなった方が祖父母の方がそれ以外の人よりも（ $\beta=-.39$ ）、否定的変化が少ないことが明らかとなった。

考 察

大学生の死別経験者においても、死別後の心理変化では否定的変化だけでなく肯定的な変化も認められ、ストレス関連成長を支持する結果が得られた。そして、ストレス関連成長には宗教観が強く影響し、死別後の心理を検討する上で重要な要因となることが示された。今後は特定の宗教的信仰を有する人たちを対象に宗教観とストレス関連成長との関係を明らかにしていきたい。

引用文献

- 金児曉嗣（1997）. 日本人の宗教性. 新曜社.
東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫（2001）. 死別経験による成長感尺度の構成と信頼性・妥当性の検証. 臨床精神医学, 30(8), 999-1006.
福岡欣治・安藤清志・松井豊（2003）. 死別体験後のソーシャルサポートと心理的適応に関する予備的研究. 静岡文化芸術大学研究紀要, 4, 55-60.
坂口幸弘（2002）. 配偶者喪失後における過去の肯定的・否定的評価と精神的健康との関係. 心理学研究, 73(5), 425-430.
渡邊照美・岡本裕子（2005）. 死別経験による人格の発達とケア体験との関連. 発達心理学研究, 16(3), 247-256.
河野由美（2013）. 遺族の死別後の主観的变化とその影響要因—ストレス関連成長の視点から— ヒューマンケア研究, 14(1), 掲載予定.

本研究は科学研究費補助金（基盤B：研究代表者松島公望）の助成を受け実施した。